

意識
鐵砲記

西之表市立図書館

意識「鉄砲記」

大隅の州を南に離れること十八里に、一つの島がある。名を種子という。我(十六代島主)が祖先が代々ここに住み、島主の地位を相伝している。

島を種子と名付けたのは、この島は小さいながらも住む人は多く、しかもその暮しはゆたかである。これをたえて言えば、一粒の種がきわまりなく殖えつづけるようなもので、これから名付けられたのであるという。

むかし、天文年間の壬寅(十二年)の秋、八月二十五日、我が島の西ノ村の小浦に、見なれぬ形の大きな船が現われた。どここの国から来たのかはわからない。船客はおよそ百人あまり、その姿はたとえようもなく変わっており、その言葉もまるで通じない。

これを見た村人等は、一様に不気味なものを感じて不安気に浜に人垣を作った。しかし、その客の中に、大明国の儒生(学問を志す者)で、名は五峯という者が居たのは幸いだった。だがこの五峯についても、その名のほかは、詳しいことは言うまでもなく名字すらもさだかではない。

住んで居り、この島のかなめと言うべき所である。港に沿って数千戸の家があり、家毎に富み榮えている。また島内のいたるところから人々は集まり、それらの人々で往還は織るよう賑わっている。いまこのまま荒海に向かつて船を繋ぐよりも、波をさえぎり港内も深い赤尾木の港(現在の西之表港)に船を廻すにしくはない。すぐこのことを島主・時亮とその父・恵時に報告しよう」と。

五峯等はこのことを納得して船に帰り、織部丞はすぐさま、赤尾木の港へ報告した。島主はただちに大船を赤尾木の港に曳航するように命じた。

二十七日、小舟十数艘に曳かれて、大船は赤尾木港に入港した。この時にあたり、日向の禪寺・龍源寺の主座を勤める僧が、この港頭の慈遠寺に滞留していた。目的は法華宗を学ぶ為だったというが、ついに禪から法華へと転じ、名も住乗院と改められていた。

この住乗院は、ほとんどの経書(四書、五経、十三経など)に通じているのみでなく、その筆の手は流れるように早かった。はからずも五峯と会って、筆談で意志を通じあうことができたのであるが、五峯の方で「異国で心の友に会うというのはこのことか」と歎

時に、西ノ村の村長に西村織部丞という者が居り、よく漢文に通じていた。五峯を見るや砂上に杖で次のように書いた。

「船の客は、何という国の人か、中には一きわ姿・形の変わった者がいるが、それは何故なのか」と。これに對して、五峯もまた砂上に文字を書いて答えた。

「これは、はるか西南の方の蛮國の商人たちである。一通りは君臣の間の、守るべきすじみちはわかまえているとは言え、その中にも守らなければならないしつしみや作法を知らない。それ故に飲物を飲むにも杯を用いることもなく、喫べるときもそのまま指で喫べ、箸を使うこともない。自分の好きなことにふけり、字間が天地のすじみちをあきらかにすることも知らない。いわばこの商人たちは、何処か利のあるところに行けばそこに腰をすえようと言ったぐいである。自分らの持っている物を、無い処に行つて売るもので、別段あやしいものではない」と。

おおよその事情を知った織部丞が、また砂文字で言った。

「ここから十三里(五十二軒)ばかり北に行くと港があり、赤尾木と言う。そこには私が仕えている島主が

んだ。よく言われる「こころざしを同じくする者は自然に相会う」というものである。商人の長が三人、名は一人は半良叔舎、一人は善利志多、一人は作孟大と言う。いつも手に一つの物を携えている。それは長さは二三尺、外観は真重で中に穴が通つて筒になっている。見かけ以上に重いが特徴と言えよう。穴が通つていると言え、その一端は堅く塞ぐ必要がある。その塞いだ端に近く極めて小さな一つの形は、かつてこれと筒の中に火を通す穴である。それを用いるには、まず粉の薬をその筒の底に入れ、更に小さな丸い鉛の玉を入れる。次に的となる小さな盃を岩の上に置き、一物を頭によせて姿勢を正し、片目を閉じて筒を的に向けて狙う。次いで底に近い小さな穴から火を放せば、瞬にして盃は砕け散ってしまう。まず火を発する時は雷の光るのと同じく、同時に発する音は落雷の時のとどろきそのものである。その場に居合わせた者は、色を変え、耳を掩わぬ者はなかつた。盃を岩の上に置いたのは、的に黒点を書くのと同じ事である。

この物を一たび発すれば、たとえ銀山であろうとも

砕け散り、鉄籠も射とおすことができよう。国に對し害をはかる者は、これに触れるやいなや魂を失うであろう。ましてや苗に害をする鹿など言うまでもない。こうした用途は例をあげて数えることもできないくらいである。

時亮はこれを見て、この世にまれな宝物であると考えたのである。しかし、こうした宝も、はじめは誰もその名を知る者となく、またその用途、用法を詳しく伝えられることもなかった。それゆゑ、何時となく鉄籠と呼ぶようになったが、これは明人がその名づけたのか、あるいは我が島の者が名づけたのか、それらは詳しく知ることはできない。

ある日、時亮は、明國語と南蛮語の二人の通訳を仲だちとして、「自分がこれを能くするという自信はない。しかし、これを学びたいという気持ちは強いのだが、どうであるうか」と蛮人にたずねた。蛮人は、「公がこれを学びたいとのことであれば、我々もまた秘法や奥義の一切を教えましょう」と答えた。

時亮は驚きと喜び、「ほんとうに奥義を聞くことができるのか」と問い返した。すると蛮人は「はい、それは心を正すことと片目を閉じるだけのことなので

す」と答えた。

時亮は「心を正すということは、昔の聖人が人を教える根本である、自分もつとにこれを学んできたところである。およそ天下を治めるためには、すべてこの理に従わなければ、世のうごき、言うこと為すこと、おのずから行き違ひが生じないとは言えない。其方が言われる心を正すは、自分がかねて習ひ覚えたことと異なるものではない。ところで、片目を閉じることとは、遠くのもの、を明らかに見ることはならないことではないか、いったい、なぜ目を眇めるのであるか」とただした。蛮人は

「ものごとには、おのずから出来上った手順とか極りがあるもので、その手順や極りを守ることが大切である。目を眇めるのもその極りで、ただ広く見るだけでは十分には狙うことにはならない。目を眇めるには、余分のものは見ずに、遠くを目当てに明を及ぼすのである。どうかこのことわりを悟ってほしい」と説明した。

時亮は納得して

「老子が、見ること小なるを明と言ふ。と言ったのがこのことなのか」と独り言いた。

この年の九月九日、時亮は蛮人のその物を自分の手

で試すことになった。習ひ覚えた通り、その筒に薬と鉛の玉を入れ、盃を百歩はなれた所に置き、敵し教わった通りの手順で火を放った。結果は蛮人の場合とほとんど違わないものだった。一瞬、皆が驚きの声をのみ、ついでその威力に恐れのとよめきとなった。そして期せずして「我々もこれを習ひたい」と声を合わせた。

時亮は、その値段の高いことなど気にかげず、二挺を買ひ取って家宝とし、その恐るべき薬の製法、調合の方は、家来の源河小四郎に学ばせた。

時亮は、朝は朝、夕は夕と、心をくだいてその仕組についての知識、その使い方についての修練を積み、腕を磨いた。そして、ついに百発百中の腕前に達したのであった。

こうした時、紀州の根来寺の杉の坊という者が、千里を遠しとせず、種子島に伝えられた宝器を手に入れた一心で来島した。時亮はその杉ノ坊の熱心さに心をうたれた。その気持を察して言った。「むかし中国で、徐君という人が、友の手札の持っている剣に心を奪われた。しかしそれを喉にも出したことは無かったが、手札には徐君の気持がよくわかった。ついに

その愛刀を徐君に贈ったことだ。我が島は南に偏在した小島で、自分はその島主たるに過ぎないが、どうしてこの宝器を独り占めしよう」と。ついで時亮は一挺の宝器、鉄砲を津田監物に托して、杉ノ坊に贈ったのである。もちろん、妙薬の火薬の製法や発射の方法も教えたのである。

時亮はただ一挺の鉄砲を扱うにつけ、これを自分らの手で作らなければならぬと思つた。鍛冶数人を召し集め、鉄砲をつがばに見せ、調べ、絵にうつし、製作する方法を考えさせた。

鍛冶たちは、苦心さんたんの鍛錬をつづけ、月がたち秋が去り冬が来た。そして形だけは十分たがわぬものを作つたが、鉄の筒の底を捻りて切つて塞ぐ作り方が、どうしてもおまかないまま半年が経つた。そうして年が明けて春、中国に去つた南蛮船が、今度は島の東側の熊野浦に再び姿を現わしたのである。

浦を熊野と名付けたのは、浦に沿う岩山が熊野をしのばせているからで、小嵐山とか小天竺とかの地名と同じ縁起と思われ。

は、これこそは天の恵みと喜び、早速、八板金兵衛

尉清定を熊野に遣り、本職の鍛冶に、筒の底を塞ぐ^た鉛の方法を学ばせ、会得させたのである。そしてその年のうちに数十挺の鉄砲を完成させたのであった。もつとも、木製の台の彫刻とか鍵や鎖などの飾りなどは、時堯にとっては二の次で、実用としての使い易さが重要であった。こうした実用中心の考えから、家臣の中には寸暇をおしんでこれを習い、百発百中の者は数えきれないほどであった。

その後、泉州・堺の商人・橋屋又三郎という者が来て、二年間この島に滞在し、鉄砲の作り方、火薬の製法射撃の方法などを学んで昇り帰った。堺では橋屋又三郎とは呼ばず、鉄砲又と呼んだという。こうして畿内や近郊に伝わり、皆あらそってこれを学んだ。こうして畿内とどまらず、関西から関東にも伝わったのである。

自分(久時)が、かつて古老に聞いたことであるが、天文年間(壬寅・癸卯の時、大型の朱印船が、明国に向かうことになった。この時、畿内およびその西の各地の富豪の子弟が、商売するというので船に乗り込んだ。

その数およそ千人。他に船の水夫らをはじめ、乗員

今鉄砲が国内あまねく行き渡ってすでに六十年あまり、白髪の老人の中には、伝来の頃の種々の世の様をはっきりと記憶している者もある。それ故に明らかなのは、まさに南蛮國の鉄砲二挺を、島主・時堯が買いかめてこれを学び、その一発こそは、扶桑(日本)六十余州の耳目をそばだせたのであった。しかも鍛冶たちにこれを製作する技を修得させ、五畿(山城・大和・河内・和泉・摂津)七道(東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道)にあまねく行き渡らせたのである。言うまでもなく、種子島こそ日本に於ける鉄砲のはじまりの地である。これは明らかかな事実である。

むかし、一粒の種子が渺りなく殖え栄えたことを採って名としたこの島は、この鉄砲についても、予言が適中したこととなる。古人の言に「先祖に徳功がありながら、世にそれをおらかにし得ないのは後の世の人の過ちである」と。

よってここに書き誌すものである。

慶長十一年丙午 菊の節供

種子島左近太夫將監 藤原久時 花押



が数百人。ここ種子島で船もやいをした。そして天候を見極めて錨解いたが、不運にも数日後、海は狂瀾怒涛となった。地軸をくだくような大風で、第一船は橋は傾き楫は折れ、ついに海底に姿を没した。第二船はようやくして明國の寧波府に着いたものの、第三船はようやくのことで種子島に引き返すことができた。

翌年、第三船はまた明國をさして帆をあげた。その往路は風に恵まれ、商いもまた順調に進み、多くの珍宝や奇貨を満載して帰途についた。しかし、またもや空を黒く覆う暴風にまき込まれ、東西もわからぬまま漂いつづけて、流れついたところは伊豆の海であった。しかもこの船を知った土地の人達は、たちまち盜賊となつて襲いかかり、すべての財貨を奪い去った。そして便乗の商人たちも行き方しれずなつてしまった。

この第三船には、種子島家の家臣、松下五郎三郎といふ者が乗っており、松下は鉄砲の名手であった。この騒動に怒り、鉄砲一発を放つてその威力を見た。これは伊豆の人達も仰天した。その中には、松下を偉人としてうやまい、師として慕い寄る者も多かった。こうして鉄砲は関東の八州にひろがり、更に日本全国のみまでひろまったのである。

鉄砲伝来の根本史料は、慶長十一年、第十六代島主久時が、薩摩の大備で、大龍寺の開基・南浦文之に依頼して作った「鉄炮記」であることは定説である。

この「鉄炮記」は、郷土史料集の第三巻として発行されているが、難解な漢文であるため親しみにくいことはいなめない。このたび先ず親しめる階梯本を作ることとなり、はじめは逐字訳と考えたものの、それにはそれなりの疑点もあって、意訳という形をとることにした。その中で四ヶ所について御了承を得たいと思う。

一、西村藤部丞が砂上の筆談の中で「祖父恵時、老父時亮」と原文はなっているが、これは依頼した久時との続柄であって、藤部丞の言葉としては間違えという紛れも出てくる。その紛れを正すために「島主時亮、その父恵時」と改めたこと。

一、紀州・根来寺から来島した者は杉ノ坊某と原文にはあるが、しかし続いては津田監物ともとれるものの、これはそのままの形でのこした。

一、久時が古老に聞いたこととして、三頁船が種子島から明国に向かった記事で、天文年間の壬寅・癸卯の時とあるが、癸卯は天文十二年に当り、その前年とともに、ここには何かの錯簡があると思われるが、これもそのままにした。

一、全面的に改めたのは、賈胡の長二人あり、を三人とし、一は半良叔舎、一は喜利志多、一は佗孟太としたことである。

以上、意訳を試みながら感じたことは、文之和尙が、この日本最初の西欧技術の伝来を如何に書くべきかに、どんなに苦心されたかということを痛切に感じたのであるが、読者もまた、この意訳を踏み台として、原文へ取り組んでいただければ幸甚である。

昭和六十一年三月三日

意 訳 鉄 砲 記

昭和六十一年三月十五日発行

西之表市立図書館